

特集 就任挨拶

熊本大学大学院生命科学研究部 消化器内科学講座

教授 田中 靖人

魅力ある消化器内科学を目指して
〜10年後の大樹を育てる〜



令和二年（二〇二〇年）六月一日
付で、初代 佐々木裕教授の後任として熊本大学大学院生命科学研究部 消化器内科学講座の教授に就任しました。すでにホームページでもニューアルさせて頂きましたので、是非一度ご覧頂きたいと思います。

<https://gastro-kumamoto-u.com/>

私は、十年後の大樹を育てるため、四つのモットーを掲げて臨床・研究・教育に邁進したいと考えております。

①若い医師が集う明るく、開けた教室運営。

②臨床研究の両輪であるトランスレーショナルリサーチ (TR) と Evidence-Based Medicine (EBM) を推進する「Physician Scientist (研究マインドを持った医師)」と「専門医」の育成。

③教室の伝統を継承し、臨床と研究のどちらにも対応できる教室運営の実践。

④“和”を重視…医局員の調和、関連病院との連携、新たな発展性のある臨床研究・臨床治験を展開します。

学内／関連病院との連携・人材交流
「熊本」に根付いた臨床・研究の実践を目指します。

熊本に赴任して、二〇二〇年十月五日、嬉しいニュースが飛び込んできました。「C型肝炎ウイルス (HCV) の発見」によりハービー・オルター博士ら三名が二〇二〇年のノーベル医学生理学賞受賞という知らせです。同じような喜びは二〇〇〇年に私が米国 NIH 留学中に当時の上司であるオルター博士がアルバート・ラスカー賞を受賞した時に経験していました（当時の写真、図1）。私は、一九九九年から NIH オルター博士の指導のもとに留学し、一九七〇年代から彼が保存してきた輸血後肝炎患者のシリーズ血清から HCV を分離・遺伝子解析により、当

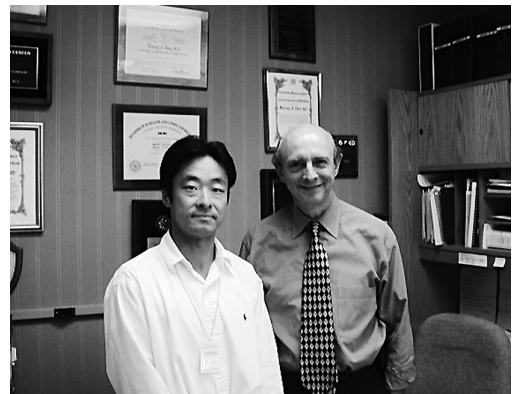


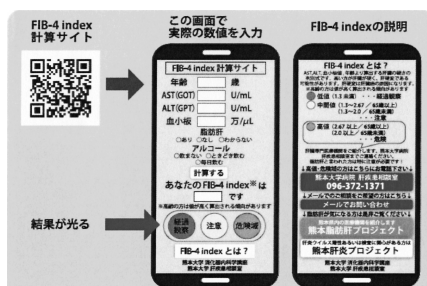
図1. オルター先生との写真
(米国 NIH にて、2000年)

時の日米における肝発癌率の違いを証明しました。

帰国後は、ホスト因子に注目し、ゲノムワイド関連解析 (GWAS) を実施した結果、C型肝炎に対する当時の標準治療であったペグインターフェロン・リバビリン併用療法の有効性に関連する IL28B 遺伝子多型を同定しました (Nat Genet 2019, Scopus 被引用数千九百三十五回)。この発見により、八〇%以上の確率で有効／無効を予測できるようになったばかりか、治療抵抗性である IL28B マイナーク群に対する新規治療薬の開発研究が効率的に進み、短期間で現在の画期的な内服治療の臨床応用に繋がりました。

今回のノーベル賞受賞を機に改めて

血清や組織の保存 (バンキング) の重要性を再認識しました。熊本大学に来てすでに約一年が経過し、私の目標とします「Physician Scientist」の育成、すなわち臨床の中で感じた疑問をそのままにするのではなく、研究マインドを持って解決していく姿勢が医局員にも少しずつ浸透しているように感じます。未だ、全国的には COVID-19 が蔓延している状況で不自由な時代ではありますが、今こそ stay in Kumamoto で地盤を固めて行きたい



※ 危険域 判定の方は専門医療機関で精密検査を受けましょう
詳しくは、熊本脂肪肝プロジェクトのホームページをご覧ください。
お電話または下記 FAX 送信で患者様ご自身から申込み可能です。

図2

2020年 新たに始動！
熊本脂肪肝プロジェクト
(脂肪肝早期発見・治療サポートプロジェクト)

**もう迷わない！
手おくれになる前に。**

この「熊本脂肪肝プロジェクト」は、肝臓の繊維化(硬さ)を評価する「FIB-4 index」を用いて、病状が進行する前に専門医を受診してもらう体制を確立しています。脂肪肝が原因で発生する脂肪肝・肝硬変・肝がんにならないためには「脂肪肝」の発症で放置しないで治すことが大切です。

10年後
脂肪肝 → 脂肪肝 → 肝硬変 → 肝がん

図1. 肝臓の硬さの推移

図2. FIB-4 index の活用

熊本大学病院 肝臓センター
TEL 096-372-1371